

## ジョルジュ・サンドに見る文学と行動(Ⅲ)

——〈二月の日々〉のルポルタージュ——

持田明子

(1999年6月1日受理)

そのとき私は彼女の描写は誇張されている  
と思った。しかしそうではなかった。つ  
まり、その後起こったことがそれをはっ  
きりと証明したのである。

(A・ド・トクヴィル『回想録』)<sup>①</sup>

秩序がパリに行き渡っている、だが、それ  
は16年前、ワルシャワを支配していたあの  
秩序ではない。

(ジョルジュ・サンド「パリの街」)<sup>②</sup>

臨時政府内務省発行の『共和国公報』(*Le Bulletin de la République*) 執筆で、ジョルジュ・サンドの1848年の革命への関与は頂点に達した。無署名の論文ではあれ、革命の興奮と熱気の中で揺るぎない信念を吐露した、きわめて直接的な関与であった。とはいえ、臨時政府の打ち出す政策の意図を国民、とりわけ、都市労働者と農民層に解説し、賛同を得ることを第一義とした執筆であり、あくまでも公的機関紙、公報としての任務を課せられたテキストであったことは言うまでもなく、執筆後、臨時政府委員の検閲に付されることがあらかじめ定められてもいた<sup>③</sup>。ジョルジュ・サンドが1840年代に執筆した政治的論文集(*George Sand Politique et polémiques 1843—1850*)を編纂した、歴史学者ミシェル・ペロー女史は、『共和国公報』執筆の経緯に言及して、この検閲に付すという条件にまさしく、ジョルジュ・サンドに付与された権限の限界を見る：

臨時政府は3月15日の閣議で、サンドに執筆を懇請することを決定した。〈内務省は

『共和国公報』に掲載する論文に関し、ジョルジュ・サンド夫人と合意を図るものとする。》これはエチエンヌ・アラゴの助言に基づいてのことであった。(…)主題の選択は自由であったが、執筆したテキストを臨時政府の任命した人物に委ねなければならなかった。この人物が校正刷りを読み直し、校了紙に署名する。3月15日、12名の閣僚が4月7日まで輪番で任命された。従って、サンドにこれらのテキストに対して道義的な責任はあるが、最終的な政治的責任はなく、このことは彼女の権限の性格と限界を示すものである④。

革命の混乱の中で政府の業務がどのように遂行されたか、その一端をうかがわせる箇所をあわせて引用したが、この『共和国公報』執筆とほとんど並行して、ジョルジュ・サンドは自らの新聞——ピエール・ボカージュに書き送った言葉によれば、《思い通りの新聞》⑤——を発刊し、『民衆の大義』(*La Cause du Peuple*)と名づけた⑥。4月9日の第1号に寄せた長文の〈序〉で、発刊の精神を詳述し、次のような言葉でこの〈序〉を結んだ：

したがって、われわれが取り得る順序は純粹に年代順である、つまり、さまざまな領域で次々と継起する、複雑な出来事がわれわれの検討課題となるであろう。本紙はその瞬間の感動を直接、伝えよう。精神を昂揚させるこの感動を共有することで、われわれは確かに全体の生活の中にある。そして、われわれが今日、その大義を弁護している民衆の感情を吸い込む。後世がこの大義に審判を下すであろう⑦。

ところで政治学者であり、歴史家であったアレクシス・ド・トクヴィルの長大な『回想録』(*Souvenirs*)は、二月革命期のフランス社会の克明な記録であり、とりわけ、同時代の政治的指導者たちの姿を活写したものとして、その証言の重要性はつとに知られているが、彼はこの時期にサンドと初めて顔を合わせた、とある晩餐会での会話に触れ、彼女の現状認識の驚くほどの確かさを特記している：

ミルンは私をサンド夫人の隣にすわらせた。(…)私たちはたっぶり1時間、政治情勢について語った。サンド夫人はこのとき、政治家のようであった。サンド夫人はきわめて詳細に、また、不思議なほど生き生きとパリの労働者たちの境遇について、彼らの組織や数や武器について、彼らの行動や思想や準備や恐るべき決意について描き出した。そのとき私は彼女の描写は誇張されていると思った。しかし、そうではなかったのだ。つまり、その後起こったことがそれをはっきり証明したのである⑧。

トクヴィルは、確かな筆致で、民衆の中に身を置いたジョルジュ・サンドの姿を鮮やかに描き出す。わずかに3号を出しただけで廃刊に追い込まれはしたものの、《瞬間の感動を直接、伝え》ようとした、週刊紙『民衆の大義』の執筆者は、まさしくトクヴィルの伝えるジョルジュ・サンドである。

本稿は、この週刊紙に掲載された、すぐれて時事的なテキストに、革命の日々の《出来事》の最中<sup>きなか</sup>にあったジョルジュ・サンドの一ペンの力を信じた人間の意識と行動を読み取ろうとするものである。

## I. 「パリの街」(Les rues de Paris)<sup>⑨</sup>

(1848年4月8日)

街路や広場、まさにこうしたところで、フランスの生活が目下、繰り広げられている。一刻も早く、共和国の到来を祝おうとし、また、そうできるのがうれしく、フランス中の人間がここに駆けつけ、これまでのものとは、かつて一度でも存在したものとはいささかも似ていないこの都会の、今までにない光景を強い関心を持って観察している。

実際、不思議な光景。この一か月、日毎に変化した、時々刻々変化した光景。事件の翌日のパリは、われわれには平穩すぎるように思われた。金持ちたちは新たな事件を懸念しているようであり、身を潜めていた。市庁舎やリュクサンブール宮付近を除けば、疲労困憊した民衆はほとんど姿を見せていなかった。(…)パリの至る所で舗石がはがされていた。まるで小さな地震が地面を波立たせたように。馬車は苦勞して走っていた。不可抗力的にストライキが広範囲で発生したが、一斉の活動停止に対してことさら抗議する者はいなかった。通行人やあらゆる種類の車の往来は驚くべき速さで復活した。高位高官が数多く逃亡したり、豪華な馬車を廃したが、そうしたことに気づく者はほとんどいない。彼らのパニックは有害で、とがめられるべきことだとどれほど話題にされようとも、そのことについて考えるのは難しい。つまり、山ほど興味をそそることが眼前にあり、新しい感動が心にあるからだ<sup>⑩</sup>。

第1号のために執筆した論文「パリの街」を、筆者ジョルジュ・サンドは、歴史的な出来事を経験したばかりの首都の光景の素描で始める。ついで、本論文で実質的に呼びかけようとしている、恐怖にとらわれた中産階級の人間に照準を合わせる。スポットライトに浮かび上がる舞台上の役者のように、そのしぐさの一つ一つが彼らの〈恐怖〉を際立たせる：

だが、いわゆる保守的な中産階級は目にするものにおびえ、また、憤慨する。《あの怠け者たちは街頭で一体、何をやっているのだろうか?》と、用心深く、窓を細目に開けて、小声で言う。《パンを手にするために働くこともせず、旗や松明を振りかざし、『ラ・マルセイエーズ』を歌い、ありとあらゆる幼稚な示威行動をして、夜も昼も歩き回っているのは、奴らに実に似つかわしいことだ!おかげでこちらは、食後に休息を取り、心安らかに消化に努める手だてがもはやなくなってしまった。爆竹や銃撃の音に思わず飛び起きる。絶えず、暴動が界限に広がっているような気がするのだ。それは太鼓をたたいている鼓手や、新聞を運んでいる街角の新聞売りであり、また、ちょうちんをねだっている子どもたちや、通り過ぎる国民遊撃隊、自由の木を植えている音だ。どちらに注意を払えばよいのか、皆目わからぬ始末だ。それから、代表団、式典、聖職者や兵士たち、おまけに、この街で、自分たちの国の『ラ・マルセイエーズ』を厚かましくも歌っているイタリア人やポーランド人、などなど!何が何だかさっぱり分からぬ。こうしたすべてがわれわれに不安を呼びさます。臨時政府ならびに警視庁に勇を鼓して言おう、フランス中が耳を傾けてくれんことを。《われわれは恐怖を抱いている!》と。われわれの不満を言おう、目下、出来<sup>しゅつたい</sup>していることに抵抗しよう。今こそ、姿を見せる時だ。われわれはおびえている<sup>⑩</sup>。

ドーミエの作品を思わせるこの戯画は、自らが作り上げ、膨らませた〈敵の影〉に恐怖の叫びを上げんばかりになっている中産階級の人間の哀れにも滑稽な姿とともに、首都のあちこちで繰り広げられているさまざまな光景を鮮やかに写し取る。ジョルジュ・サンドの筆は揶揄と容赦のない辛辣さを帯びる。

——おびえている? 今、フランスにあっておびえるとは素晴らしいことだ! 実に感動的だ、実に高貴で、実にフランス的だ、自慢するに値することだ! 保守的な中産階級にわれわれは敬服する。彼らは恐れている、そして、そのことを進んで口にするのだ! 彼らは金を隠す、その顔には引きつったような笑いが貼りつき、ひざは震えている。彼らが仕事を停止させながら、仕事をしないと民衆を非難する。激しい恐怖を少しずつ蒔き散らし、偽りの情報をでっち上げ、荒唐無稽な考えを抱く。財政危機を嘆きながら、その危機を精一杯、増大させる。どうしろと言うのか! 彼らは恐れている! (…)  
彼らにとって費用のかさむものになり、弱体化するのを見るにつれて不満をもらしていた権力を、今になってなにゆえに惜しむのかと問われると、彼らは恐れていると答え、そうした言葉がフランスという名の国のあらゆる共感を呼びさまさぬことに、あらゆる敬意、あらゆる賛辞を得ないことに驚くのだ!

何と見上げた中産階級であることか！ フランスというこの言葉が何を意味するのか、ご存知ない？ 二千年の昔からこの名が全世界で名誉と勇気と同義語であったのをお忘れなのか？ 「フランス人のように勇敢である」と外国人が評されるのをご存知ない？ 七月と二月の日々にパリの女や子どもたちが胸をはだけ、素手で砲弾に立ち向かったのを目にしなかったのか？ 否、確かに見なかった、隠れていたのだから、おびえていたのだから！

おお、何という意気地なし！ 卑劣にして滑稽な亡霊、異様で、軽蔑に値する醜悪さ、民衆の雄々しい精神が世界の自由を宣言するときに、ここで何をしようというのか！ わが国は悪ふざけでそなたを大道芝居の舞台に押し出したと思っていた。青ざめ、引きつったそなたの仮面を嘲笑する権利が無いなどと思うような、場末の人間は一人としていなかった。だが、そなたは実在の人間だ、虚構の人物、道化芝居の登場人物ではない。そなたは震えながら近づいて来、市民の祭典が挙行されるのをおびえた目で見つめている。そして、いかなる出自で、何者なのかとたずねられれば、そなたは答えるのだ。《どれほどの代価を払おうとも、平和を望む、高貴にして有益な体制の出身である。私のことはよくご存知のはずだ。戦争、反乱、変動、進歩を常に恐れていたのは私だ。国家が望むものことごとくに反対していたのは私だ。私は常に抵抗し、常に震えている人間だ。私は恐れている人間なのだ。》と⑫。

眼前で刻一刻と新たな展開を見せる出来事におびえるばかりで、打ち崩された過去の権力の残骸にすがろうとする、見る影もない中産階級に対して、筆者は民衆と一体になって、彼らの支配の終焉を宣言する。

そなたは自分の窓の下で歌が歌われるのを望まず、自分のまわりの空気が他人に吸われるのを望まず、自分の住む界限を人が歩くのを望まない。ああ！ われわれはそなたを哀れむ！ そなたの支配はもう終わったのだ。空気も街路も今日ではすべての人間のものだ。民衆は大胆不敵にそなたの屋敷のすぐ傍を通行し、散歩し、すぐ傍で呼吸し、歌う。そなたがまだそこにいるかどうか知ろうともせずに。そなたが隠れているところが地下倉なのか、それとも納屋なのか、誰にもたずねようともせずに⑬。

(下線、引用者)

次いで、ジョルジュ・サンドの視線は、一転して、まだ少年と云っていいような《若者たちの民兵》に注がれ、革命の最中に首都の秩序を担っている彼らの自負と高揚を伝えようと努める。

街路の奥から風変りな行列が近づいて来る。人間を完璧な機械に変えてしまう軍隊の隊形のようにしゃちこぼってではなく、行動することに満足し、情熱を燃やしている自由な人間を感じさせる志願兵のようにのびのびと、潤達に歩を進めている。秩序は、この若い民兵、応急の規律を自らに課すことが誇らしく、進んで整列する民兵の列の中にある。ある日、われわれの傍で注意深く観察していた一人のイギリス人が、国民遊撃隊<sup>⑭</sup>はどこにいるのかとたずねた。《あなたの目の前を通り過ぎていきますよ、ほら。》《何ですって、あの少年たちですと?》《その通りです、彼らは世界中の四つ辻に、お望みとあらばテムズの河岸にも、自由の木を植える手伝いをしようと待ち構えていますよ。》

確かに彼らの多くはまだ少年だ、背丈が低く、ひ弱な感じがする少年だ。彼らはパリの子どもたち、奇跡の子どもたちだ。悲惨の中に生まれ、苦しみの中に成長し、欠乏の中に生きている子どもたちだ。気難しく、神経質で、遅鈍でもある、だが、興奮しやすく、激しく反応する傾向がある、つまり、複雑な気質なのだ、感動と知性と活力に富んでいる。こうしたことはすべて彼らの思考に影響を与えている。身体はひ弱に見えるが、精神はかくも強固だ! この若々しい民兵の高揚に立ち向かおうとする巨人はいない。梃子や斧はおろか、いかなる種類の道具も持たず、ただ、いかにも都会育ちらしいやせた腕とほっそりした手だけで、乗合馬車を転覆させ、並木を切り倒し、鉄柵を引き抜き、舗石の山を築かなければならないのか? 作業がなされ、バリケードが築かれてはじめて、人々は奇跡を理解し、奇跡を目の当たりにする<sup>⑮</sup>。

首都パリのそこかしこで展開する〈歴史的な出来事〉を描写するジョルジュ・サンドの筆は、そうした出来事を冷徹に観察する者の筆を超え、行為の主体者たちの精神を共有するものとなる。

われわれは芸術家であるゆえに、色彩と優雅さと装いを愛するゆえに、築いたバリケードのいただきに飾りとして緑の枝、赤い吹流し、旗、そして、勝利を記念するものを置く。ただ防御の壁であるだけでは十分ではないからだ。祭壇であることが必要なのだ。市内の至るところで芸術家にして労働者であり、そして戦士であるパリの若者の漠としてはいるものの昂揚した精神主義がその作品に刻印を押す<sup>⑯</sup>。

十字架像を高く掲げた聖職者たちの行列。力強く響く太鼓の音。学生や労働者たちの行進。自由の木。共和国への供物——革命の日々の多様な示威行動と躍動する群集の姿が、市中にみなぎる熱気、高揚感とともに、くっきりした輪郭と鮮やかな色彩で描き出される。

われわれがヨーロッパの未来の解放者たちを観察している間も、行列は途切れることなく続く。司祭たちが太鼓の音に合わせて歩き、うっかり前の者の足を踏んでしまう。キリストの十字架像が共和国の旗と並んで群集の頭上を舞う。感動し、行進に引き込まれたこの聖職者たちを偽善者呼ばわりし、背徳者呼ばわりするカッサンドル（＝恐怖<sup>(註)</sup>を抱いた中産階級）が何と言おうとも、この光景は自然で、申し分なく論理的な結合を示している。

もし太鼓というものが存在しなければ、考案する必要があるだろう。その低く、よく響く音は民衆の声に似ている。それは神経を刺激し、血を沸き立たせ、耳をつんざき、好戦的感情をかき立てる。(…)

ついで労働者たちが、学生やあらゆる学校の代表者、あらゆる同業組合のメンバーたちと入り混じってやって来る。作業着、軍服、平服、ジャケットが混じり合う。腕を絡ませて、連帯、つまり、友愛にみちた平等が獲得されたことを宣言する。

だが、それはまだ、狭く、奥ゆきのある通りに広がっている、巨大な蛇のような行列の先頭にすぎない(…)木々の葉でこしらえた冠をかぶり、銃の代りにつるはしやすき、あるいは、斧を手にして前進するこれら頑強な労働者たちは一体、何者なのか？ 若いうちから白いものの混じったあごひげに、頑健そうな顔色をし、重々しくしっかりした足取りの、一目でそれとわかる舗装工であり、土工であり、木こりたちだ。彼らの後ろで50人の男たちが松の巨木を軽々とかついでいる。その緑の枝は少年たちに支えられ、舗石の汚れから守られている。通り過ぎてゆくのは自由の木、つまり、共和国の象徴なのだ。脱帽されよ、カッサンドル、誰一人、そなたに強制はしない。だが、誇り高く、燃えるような彼らの視線がそうするように勧めている。もっとも、そなたは二つ返事で承諾する人間だ。

これがパリのそこかしこで絶えず出くわす行進の光景だ。時には三色飾りのかごであり、その長いリボンを運ぶことを彼らは誇りにする。そして、それが通過するとき、共和国への供物で一杯になる。労働者たちは重い箱をかついで、さまざまな同業組合の一日の労働の報酬を臨時政府にうやうやしく献じにゆく。感動を呼ぶ示威行動、貧者の崇高な献金！

自尊心や個人的利益が傷ついた芸術家たち、そなたたちにはこのような動く絵、表情豊かな顔が見えはしないのか？ このような即興の作品を作り出すのに大きく働いた感情はそなたたちの心や才能に何も語りかけはしないのか？<sup>⑩</sup>

首都の舗石の上に血は流れてはいないと、あの89年の日々のように銃剣の先に首が吊り下げられてはいないと、おびえている中産階級に呼びかけて、ジョルジュ・サン

ドは筆を置く。

そして、そなた、カッサンドルよ、そなたの窓をもう一度開けるがいい、そして、銃剣の先に首が吊り下げられていないのを、舗石の上に血が流れていないのを見るがいい。秩序がパリに行き渡っている、だが、それは16年前、ワルシャワを支配していたあの秩序ではない<sup>⑱</sup>。

II. 「4月20日の一日。友愛の祭典」 (*La Journée du 20 avril 1848. Fête de la Fraternité*)  
(1848年4月22日)

4月20日、〈友愛の祭典〉が挙行され、軍隊と、民兵隊である国民軍の大規模な行進が首都で繰り広げられた。ジョルジュ・サンドは臨時政府閣僚とともに、凱旋門の上からこの分列行進を《12時間にわたって》眺めた。《歴史の中でもっとも美しい一日》<sup>⑲</sup>——サンド自身の表現を借りるならば——の直接の証人となった翌日、年来の友人であり、4月23日の選挙でアンドル県代表の国会議員に選出されることになるアルフォンス・フルリに宛てた手紙で、この祭典に言及した：

民衆はかつてないほど事態をしっかり把握していますよ。私は望みを抱いています。  
4月20日の一日、民衆は実に立派でした！パリの中産階級はそのことをはっきり理解しました！（…）

われわれは目下、選挙で苦境にあります、ここパリもそちらと同じような状況ですよ。とはいえ、友愛の祭典はわれわれにとってよい効果を上げました。民衆は人々が考えている以上に公平であると私は思います。<sup>⑳</sup>

一方、3月12日、ノアン＝ヴィック村で共和政が宣言されて以来、村長の任にあった息子モーリスに宛てた同じ日の手紙では祭典の状況がはるかに詳しく綴られる。首都の大通りを埋めつくした群集を包んだ連帯感や市中にみなぎった高揚感を伝える手紙の行間に、村民たちの反革命的抵抗にともすれば挫け<sup>くじ</sup>そうになる息子への、共和主義者ジョルジュ・サンドの母としての思いがにじみ出る。

（…）非難の言葉や脅しに心が動かされることのないようにしてください。

今、革命のために行動している人間は誰であれ、臨時政府のメンバーであれ、ノア



ン=ヴィックの村長であれ、抵抗や反動や憎悪、脅しに直面するものです。(…)もしすべてがひとりでうまく進むのであれば、もしわれわれが成功することを望みさえすればよいのであれば、革命家であることに大きな価値があるでしょうか？ いいえ、われわれは今、そしておそらくいつまでも、執拗な闘いの真中にいるのですよ。(…)中断することができるなどと決して思ってはなりません。前進すること、それこそがわれわれの勝利と休息ですよ。

〈友愛の祭典〉は歴史の中でもっとも美しい一日でした。百万の人々がすべての恨みや利害の相違を忘れ、過去を許し、未来を気にせず、パリの端から端まで《友愛万歳!》と叫びながら抱擁しあいました、それは崇高な光景でした。この日、起こったことを残らずあなたに語るには20枚もの手紙が必要でしょう。でも、私には5分ほどの短い時間さえありません。この日の光景はあなたの想像を絶するものです。『共和国公報』と『民衆の大義』に要約した報告が掲載されます。(…)民衆が崇高な状況を深く感じ取っていること、そして、こうしたものを望んでいることをこの祭典は証明しています。(…)新聞をお読みなさい、そうするだけの価値はありますよ。あなたがこれを目にしたら、狂喜したことでしょう！ 私は12時間にわたって見物しましたが、それでも飽きはしませんでしたよ。<sup>②1</sup>

ジョルジュ・サンドは目の当たりにした《出来事》の報告文を時を置かず執筆し、最終号となった、『人民の大義』第3号に掲載する。前述した、ジョルジュ・サンドの政治的論文集の編纂者ミシェル・ペロー女史によれば、《正確を期すというよりも、象徴的な》<sup>②2</sup>その文章が描き出す〈4月20日〉の民衆の示威行動——民衆は武器を《4月の最初のそよ風に開いたばかりのリラの花》や、《女たちが自分の髪飾りから引きぬいて、投げてよこしたりボン》<sup>②3</sup>で飾り、見物していた市民や女や老人や子どもたちが《にわかづくりの部隊》<sup>②4</sup>となって行進の列に加わった——に、筆者ジョルジュ・サンドが引き出そうとした政治的意味を読み取ることは容易である。

…民衆は朝早く起きた。礼服と銃を持っている者は誰も彼も、笑顔になって、歌を口ずさみながら、大急ぎで身支度をした。フランスの民衆は、分別のある時こそ、いつにも増して陽気になるものだから。仕事着と銃しか持たぬ者は一人残らず、銃を手にし、仕事着を着た。銃をまだ持たぬ者は「マルブルック」の哀歌の中の《もう一方は何ひとつ持っていないかった》という、かくも深遠で、哲学的な詩句を思い出した。

これが意味するところは、フランス人は素手でも、空腹をかかえていようとも前進する、である。行こうとする所へはどこへでも、あらゆることに準備のできた腕、玉座で

あれ、山であれ、覆すことのできる腕と、炎のように燃える心と、一方の端からもう一方の端まで響き渡る声と、政治のあらゆる問題に対して思いがけない解決策を常に見出す論理を携えてゆく。かくして、彼は出かける。

だが、彼は一人ではない。心を打たれた彼の年老いた親たち、好奇心にみちた彼の子どもたち、彼の姉妹、けなげで熱狂的な彼の妻、誰も彼もが祭典を見物し、喝采を送り、参加し、援助したいと願う。彼らは皆、出かけるだろう。家に残る者は一人としていないだろう。(…)雨が降っている、だが、構いはしない。皆の頭の上に親切にも広げられた、この弱々しい雨よけの中に入れるのであれば、6人、12人と一緒になるだろう。うまく雨を避けられなくても、笑いとはばすだけだ。長い一日になるだろう。行進は12時間にわたって続く予定だ。食べ物があるだろうか？ なあに、そんなことは誰の頭にもない。さあ、ともかく出かけよう。<sup>②⑤</sup>

ところで、すでに述べたように、ジョルジュ・サンドはこの日の行進を凱旋門の上から、政府閣僚とともに眺めたが、パリの市街をはるか<sup>かなた</sup>彼方まで見晴かす眺望に夢中になる。19世紀中葉の壮大なパノラマをその鮮やかな筆が現出する。

何という光景！ 人類の歴史においてこのような事件が起きたことはかつて一度としてない。これほど多くの人間が、かくも狭い空間に同時に集まったことはかつてない。百万もの人間が！ 郊外に住む人々がこぞって、パリを取り巻く広大な地域の住人がこぞって駆けつけた。市民の一人一人がその家族とともに。凱旋門の頂上から見たそれは夢のような光景であった。雲が縞模様を作り、雨と日の光で分断されたこの広大な空の下に浮かび上がる力強いドーム、華麗な建造物、とがった鐘楼、尖塔、黄色に映える川、広大な牧草地、無数の家々の建ち並ぶ巨大な都市を取り巻く並はずれて大きい城壁。比類のない場面のための何という背景！ フランスの運命を司る神の前で、今日、繰り広げられた祭典に比べれば、シャン＝ド＝マルスの連盟祭は児戯にすぎなかった。武器を手にした40万人が、その初めも終わりも見ることができない長大な列を作って行進した。そして、この巨大な記念柱の周りで、全住人がこの上なく活気にみちた力の目撃者となった。この波、この河、この大海のような人々が通るのを見終るのに12時間が必要であった！<sup>②⑥</sup>

そして筆者は、祭典に集まった無数の人々を一体化している感動、熱狂的な連帯感を一気に謳い上げる。

有形の巨大なものはある種の恐怖を生み出す、高山は目をくらませ、大洋は思考をたじろがせ、嵐は想像を揺さぶる。だが、人間の作り出す偉大な状況は正反対の賞賛を呼び起こす。共感にみちた信頼感、無限の連帯感による高揚、熱狂的な感動、人類全体を愛し、抱擁したいという欲求がそこに混じり、われわれ一人一人の存在を消滅させ、すべての心で生かし、すべての肺で呼吸させ、すべての目で見させ、すべての声で叫ばせる。群集！それは何と力強く、何と温和であることか！神聖な法がその額に書き記され、真理が群集を導き、感動させる！（…）創造するこの魂に唯一の、崇高な考えが吹き込まれるとき、この魂が神の前で自由と友愛を宣言し、神に誓いを立てるとき、すべての人々の間で神聖な友情の讃歌を合唱するとき、神と結んだ契約に反対できる人間はどこにしよう？ そんな人間は今日、もはや存在しなかった。彼らは打ち負かされた。彼らは思わず、民衆とともに、民衆のように叫んでいたのだ。おそらく明日になれば、再び敵対者になろうと努めるだろう。だが、今日は、彼らは敵対者ではなかった、そうであることは不可能だった。（…）

民衆よ、このような祭典をしばしばわれわれに与えてほしい。人類にとって偉大な教訓であり、神の摂理の崇高な表れである祭典を。（…）

民衆は物質力、好戦的な感情、自らの権利の意識を持っている。彼らの銃はそれを守ろうとする堅固な意志の表れである。だが、民衆には権利の力よりもっと大きな、もっと優れた力がある。民衆は義務の深い感情を持っている、そして、彼らにとって、義務とは友愛であり、同胞への愛である。4月20日、人間の大きな要塞がわれわれの眼下で作り出されたが、そのセメントとなったのは魂の結合、心の連帯である。<sup>27</sup>

\* \* \*

この時期、ジョルジュ・サンドはこうした政治的意味をこめた時事的な論文——日々、挙行される式典や、出来する事件を報告・論評する文章を矢継早に執筆した。そして、自らの『民衆の大義』の挫折後は、友人のテオフィル・トレが発行する『真の共和国』(*La Vraie République*)に発表した。「市庁舎前で」(*Devant l'Hôtel de Ville*)<sup>28</sup>、「パリと地方。ある職人から妻への手紙」(*Paris et la Province Lettre d'un ouvrier à sa femme*)<sup>29</sup>「ルイ・ブランの起訴に関して、テオフィル・トレへ」(*A Théophile Thoré Sur la mise en accusation de Louis Blanc*)などがその代表的なものと言えるが、そのいずれにあっても執筆者ジョルジュ・サンドは歴史的な《出来事》の直接の証人であり、その論文はいわば、現場からの報告である。

ところで、ほぼ10年後の1859年4月、オーストリアがイタリア半島に兵を進めたの

を機にフランスはオーストリアと開戦、ここにイタリア統一戦争の幕が切って落とされた。以前よりこのイタリア統一問題に深い関心を寄せていたジョルジュ・サンドは時を移さず、「戦争」(*La Guerre*)<sup>⑩</sup>「ガリバルディ」(*Galibaldi*)<sup>⑪</sup>の長文の2論文を相次いで執筆、小冊子として出版した。時事問題へのきわめてジャーナリスティックな関与ではあるものの、直接の証言である〈二月の日々〉のルポルタージュに比して、生彩を欠いたものであることは否定すべくもない。

〈註〉

1. Alexis de Tocqueville, *Souvenirs*, p. 204 (Calmann Levy)
2. *Les rues de Paris, Souvenirs de 1848* (Calmann Levy, 1880, p. 9)
3. 拙稿「ジョルジュ・サンドとジャーナリズム (V)」——二月革命『共和国公報』執筆——(「九州産業大学教養部紀要」第29巻第2号 平成4年12月)
4. *George Sand Politique et polémiques* (1843–1850) présenté par Michelle Perrot (Imprimerie Nationale Editions, 1997) pp. 367–368.
5. lettre à Pierre Bocage du 11 mars 1848 (*Corr.* VIII, p. 337)
6. 拙稿「ジョルジュ・サンドとジャーナリズム (VI)」——『民衆の大義』紙発刊の周辺——(「九州産業大学教養部紀要」第30巻第2号 平成5年12月)
7. Introduction pour *La Cause du Peuple.. Questions politiques et sociales*, p. 253 (Calmann Levy, 1879)
8. *op. cit.* p. 204
9. 『民衆の大義』第1号(1848年4月9日)に掲載。*Souvenirs de 1848* (Calmann Lévy, 1880, pp. 1–9) に再録。
10. *ibid.* pp. 1–2

La rue, la place publique, voilà où circule la vie de la France en ce moment. Tout Français, empressé et heureux de saluer l'avènement de la République, accourt et interroge avec curiosité l'aspect nouveau de cette ville qui ne ressemble plus à rien de ce qu'elle était naguère, à rien de ce qu'elle a jamais été.

Étrange spectacle, en effet, et qui a changé de jour en jour, d'heure en heure, depuis un mois. Le lendemain des événements, Paris, pour notre compte, nous semblait trop calme. Les riches semblaient attendre des événements nouveaux et se cachaient. Le peuple, accablé de fatigue se montrait peu, si ce n'est aux portes de l'hôtel de ville et du Luxembourg. (…)

Paris était déparé dans tous les sens. On eût dit qu'un léger tremblement de terre avait ondulé sa surface. Les voitures circulaient avec peine. Il y avait une grève générale de force majeure, où personne ne protestait en particulier contre l'inaction apparente de tous. La circulation des passants et des véhicules de toutes les classes s'est rétablie avec une rapidité surprenante. Si beaucoup de grands personnages ont pris la fuite ou supprimé leurs équipages de luxe, l'œil ne s'en aperçoit guère, et on a beau se dire que, pour le moment, cette panique est désastreuse et coupable, il est difficile d'y songer, tant on a de choses intéressantes sous les yeux et d'émotions nouvelles dans le cœur.

11. *ibid.* pp. 2—3

Pourtant la bourgeoisie, dite *conservatrice*, s'alarme ou s'indigne de ce qu'elle voit. «Que font tous ces paresseux sur le pavé de la ville ? dit-elle, à voix basse, en entr'ouvrant sa croisée avec précaution. Il leur sied bien de se promener nuit et jour en agitant des drapeaux et des torches, en chantant *la Marseillaise* et en faisant toutes ces manifestations puérides, au lieu de travailler pour avoir du pain ! Il n'y a plus moyen de faire la sieste et de digérer en paix. Les pétards et les coups de fusil nous éveillent en sursaut. A chaque instant, on croit que l'émeute envahit le quartier. C'est le tambour qui bat, ce sont les crieurs qui promènent les journaux, ce sont les enfants qui demandent des lampions, c'est la *mobile* qui passe, c'est l'arbre de la liberté qu'on plante, on ne sait auquel entendre. Et puis ce sont des délégations, des cérémonies, des prêtres, des soldats, des Italiens et des Polonais qui se permettent de chanter dans nos rues *la Marseillaise* de leur pays. Que sais-je ! on n'y comprend rien, et tout cela fait peur. Oui, osons le dire au gouvernement provisoire et au préfet de police, et que la France l'entende : nous avons peur ! Disons notre mécontentement, protestons contre ce qui se passe, il est temps de se montrer, nous avons peur !»

12. *ibid.* pp. 3—4

—Vous avez peur? c'est bien beau d'avoir peur en France à l'heure qu'il est ! C'est bien touchant, c'est bien noble, c'est bien français, et il y a de quoi se vanter ! La bourgeoisie conservatrice nous pénètre d'admiration ; elle a peur, et elle le dit ! elle cache son argent, elle a un sourire convulsif d'adhésion sur le visage, et les genoux lui tremblent. Elle paralyse le travail et elle reproche au peuple de ne pas travailler. Elle sème l'épouvante de proche en proche, elle fabrique de fausses nouvelles, elle a des visions, elle se plaint de la crise financière, et elle l'augmente tant qu'elle peut. Que voulez-vous ! elle a peur ! (...) pourquoi elle regrette un pouvoir qui lui était devenu onéreux et dont elle murmurait à mesure qu'elle le voyait s'affaiblir, elle répond qu'elle a peur, et s'étonne qu'un pareil mot n'éveille pas toutes les sympathies et n'attire pas tous les respects, tous les hommages d'une nation qui s'appelle la France !

Honnêtes bourgeois que vous êtes ! vous ne savez donc pas, vous, ce que signifie ce mot, *la France?* Vous avez donc oublié que depuis vingt siècles, le nom de cette nation a été dans le monde entier le synonyme d'honneur et de courage ? Vous ignorez donc qu'on dit à l'étranger : *Brave comme un Français ?* Vous n'avez donc pas vu en juillet et en février des femmes et des enfants de Paris aller au-devant de la mitraille la poitrine nue et les mains vides ? Non, sans doute, vous n'avez pas vu cela, vous vous cachiez, vous aviez peur !

O poltronnerie ! fantôme honteux et ridicule, laideur grotesque et méprisée, que viens-tu faire parmi nous, au moment où l'héroïsme des peuples proclame la liberté du monde ! La malice de notre nation croyait t'avoir reléguée sur les tréteaux, et il n'était pas un enfant de nos faubourgs qui ne se crût en droit de rire de ton masque blême et contracté. Mais te voilà, tu existes, tu n'es pas une fiction, un type de la comédie burlesque ; tu t'approches en tremblant, tu regardes d'un œil effaré passer nos fêtes civiques, et, quand on te demande d'où tu sors et qui tu es, tu réponds : «Je sors du régime auguste et salubre de la paix à tout prix ; vous me connaissez bien : c'est moi qui craignais toujours la guerre, l'insurrection, le mouvement, le progrès : c'est moi qui m'opposais à tout ce que voulait le pays ; je suis celui qui proteste toujours, celui qui

tremble toujours. Je suis celui qui a peur.»

13. *ibid.* p. 5

Vous ne voulez pas qu'on chante sous vos fenêtres, qu'on respire dans votre air, qu'on marche dans votre rue. Hélas ! nous vous plaignons ! votre règne est fini ; l'air et la rue sont à tout le monde aujourd'hui. Le peuple a tant d'insolence, qu'il ose passer, respirer, marcher, chanter à deux pas de vous, sans savoir si vous êtes encore là, sans demander à personne si c'est dans la cave ou dans le grenier que vous vous êtes réfugié.

14. <国民遊撃隊> に関して、ミシェル・ペローは次のような解説を付している：

《国民遊撃隊》は街頭の治安維持のために臨時政府が創設した。常設で有給の遊撃隊は若い失業者たち、パリの人口にまだ十分に組み込まれていない、出稼ぎ労働者たちを多く徴募した。サンドの形容によれば、この“若者たちの民兵”は1848年6月、旧来のパリのプロレタリアートをはるかに多く代表する国立作業場の反乱者たちの鎮圧にあたった。マルクスおよびエンゲルスは、とりわけこの“遊撃隊”の経験にもとづいて、彼らのルンペンプロレタリアートの理論を編み出した。

(*op. cit.* p. 342)

15. *ibid.* pp. 6—7

Un cortège étrange s'avance du fond de la rue, non pas avec cette roideur de l'ordre militaire qui fait de l'homme une machine perfectionnée, mais avec cette aisance, ce laisser aller du soldat volontaire qui sent l'homme libre, satisfait, passionné pour l'action. L'ordre est pourtant dans les rangs de cette jeune milice qui s'aligne d'elle-même, fière de s'imposer une discipline improvisée. Un Anglais, qui se trouvait près de nous et qui regardait de tous ses yeux, nous demandait un jour où était la *mobile*. «Elle est devant vous, elle passe, vous la voyez. —Comment, ces petits enfants-là?— Oui, monsieur, prêts à vous aider à planter l'arbre de la liberté à tous les carrefours de l'univers, et même sur les quais de la Tamise si le cœur vous en dit.»

Ce sont des enfants, en effet, pour la plupart, des enfants de petite taille et d'une apparence assez frêle ; ce sont les enfants de Paris, les enfants du miracle, ceux qui naissent dans la misère, qui s'élèvent dans la souffrance, qui vivent dans les privations. Tempéraments bilieux, nerveux, lymphatiques aussi, et pourtant excitables et sujets à de violentes réactions, organisations compliquées, comme l'on voit, et par conséquent très riches en émotions, en intelligence, en activité. Tout cela vit par la pensée ; le corps paraît faible, mais le cœur est si fort ! Il n'y a pas de géants qui résistent à l'élan de cette milice adolescente. Faut-il renverser des omnibus, couper des arbres, déraciner une grille, élever une montagne de pavés sans levier, sans coignée, sans outils d'aucune espèce, avec ces bras maigres et ces mains assez menues qui caractérisent la race urbaine ? L'ouvrage est fait, la barricade est élevée avant qu'on ait eu le temps de comprendre et de voir le prodige.

16. *ibid.* p. 7

Et puis après, comme nous sommes artistes, comme nous aimons la couleur, l'élégance, la parure, nous mettons en ornement des branches vertes, des banderoles rouges, un drapeau, un trophée quelconque au sommet de l'édifice ; car il ne suffit pas que ce soit un rempart, il faut encore que ce soit un autel. Partout le spiritualisme vague mais exalté de l'enfant artiste, ouvrier et guerrier de Paris, met son cachet sur son œuvre.

17. *ibid.* pp.7-8

Pendant que nous examinons les futurs libérateurs de l'Europe, le cortège continue. Les prêtres marchent au son du tambour et emboîtent le pas sans y prendre garde ; l'image du crucifix plane au-dessus de la foule à côté du drapeau de la République, alliance naturelle et parfaitement logique, quoi qu'en dise Cassandre, qui traite d'hypocrites et d'apostats ces lévites attendris et entraînés.

Si le tambour n'existait pas, il faudrait l'inventer ; sa voix rauque et vibrante ressemble à celle du peuple ; elle frappe sur les nerfs, elle excite le sang, elle déchire l'oreille et remue la fibre belliqueuse (…)

—Puis viennent des ouvriers pêle-mêle avec des étudiants, des délégués de toutes les écoles, des membres de toutes les corporations ; la blouse, l'habit militaire, l'habit bourgeois, la veste se confondent ; les bras enlacés proclament la *fraternisation*, c'est-à-dire la prise de possession de l'égalité fraternelle.

Mais ce n'est encore là que l'avant-garde, immense serpent qui se déroule dans la rue étroite et profonde, (…)

Quels sont ces robustes travailleurs qui s'avancent couronnés de feuillage, la pioche, la bêche ou la coignée au bras en guise de fusil ? Ce sont des paveurs, des terrassiers ou des bûcherons au type accentué, à la barbe grisonnante de bonne heure, au teint solide, à la démarche grave et assurée. Derrière eux, cinquante autres portent légèrement sur leur épaule un pin énorme, dont le branchage vert, soutenu par les enfants, est préservé de la souillure du pavé : c'est l'arbre de la liberté, c'est le symbole de la République qui passe. Otez votre chapeau, Cassandre, personne ne vous y contraint ; mais des regards fiers et brûlants vous le conseillent, et d'ailleurs vous n'êtes pas homme à vous faire prier.

Voilà les processions qu'à chaque instant, à chaque pas, on rencontre dans Paris ; d'autres fois, ce sont des corbeilles tricolores dont on se fait honneur de porter les longs rubans, et qui, au passage, se remplissent d'offrandes volontaires pour la République. Des ouvriers portent aussi sur leurs épaules de lourdes cassettes et vont en cérémonie offrir au gouvernement provisoire le prix d'une journée de travail des diverses corporations. Manifestations touchantes, sublimes deniers du pauvre !

Artistes froissés dans votre orgueil ou dans votre intérêt personnel, ne voyez-vous pas ces mouvants tableaux, ces figures expressives, et le sentiment qui a présidé à ces compositions improvisées ne dira-t-il rien à votre cœur ou à votre talent ?

18. *ibid.* p. 9

Et toi, Cassandre, rouvre ta fenêtre, et vois qu'il n'y a pas de têtes au bout des baïonnettes et pas de sang sur les pavés. L'ordre règne à Paris, mais ce n'est pas celui qui régnait à Varsovie il y a seize ans !

19. lettre à Maurice Dudevant du 21 avril 1848 (*Corr.* VIII. pp. 430, 431)

20. lettre à Alphonse Fleury du 21 avril 1848 (*ibid.* p. 428)

21. lettre à Maurice Dudevant du 21 avril 1848 (*ibid.* pp. 429—431)

22. *op. cit.*, p. 355

23. *La Journée du 20 avril. La Fête de la Fraternité, op. cit.* p. 36

24. *ibid.*

25. *ibid.*, pp. 30—31

(…) le peuple se leva de grand matin. Tous ceux qui avaient un habit et un fusil s'équipèrent à la hâte, en riant, en chantant, car jamais le peuple français n'est plus gai que quand il a raison. Tous ceux qui n'avaient qu'une blouse et un fusil, prirent leur fusil et leur blouse, et ceux qui n'avaient pas encore de fusil se rappelèrent ce vers si profondément philosophique de la complainte de *Malbrouck* :

L'autre ne portait rien.

Ce qui signifie que le Français marche quand même avec les mains vides et l'estomac creux. Partout où il veut aller, il porte ses bras prêts à tout, capables de renverser des trônes et des montagnes, son cœur ardent comme la flamme, sa voix qui retentit d'un pôle à l'autre, sa logique qui trouve toujours une solution imprévue à tous les problèmes de la politique. Et le voilà parti.

Mais il n'est pas seul. Ses vieux parents attendris, ses petits enfants curieux, ses sœurs, sa femme courageuse et enthousiaste, tous veulent voir aussi la fête et y porter leurs acclamations, leur adhésion, leur concours ; ils iront tous. Personne ne gardera la maison.

(…) il pleut, mais qu'importe ? on se mettra six, on se mettra douze si l'on peut sous chacun de ces frêles abris étendus charitablement sur toutes les têtes. On sera mal abrité, mais on en rira. La journée sera longue, le défilé durera douze heures. Aura-t-on de quoi manger ? Bah ! on n'y songera pas. Allons toujours.

26. *ibid.* pp. 31—32

Quel spectacle ! jamais dans les annales de la vie humaine il ne s'en est produit un semblable ; jamais tant d'êtres humains ne se sont trouvés rassemblés à la fois dans un si petit espace. Un million d'âmes ! car toute la banlieue, toute la vaste ceinture de Paris accourait aussi, chaque citoyen avec sa famille. Du sommet de l'arc de triomphe c'était une vision, un rêve. Sous ce vaste ciel rayé de nuages, coupé de pluie et de rayons de soleil, la gigantesque enceinte d'une ville immense avec ses dômes puissants, ses monuments superbes, ses clochers aigus, ses flèches, sa rivière jaune, ses vastes prairies, ses maisons innombrables. Quel cadre pour une scène sans pareille ! La fédération du Champ-de-Mars n'était qu'un jeu d'enfant auprès de ce qui s'est produit aujourd'hui devant le Dieu qui préside aux destins de la France. Quatre cent mille hommes armés, marchant sur une ligne immense et dont l'œil ne pouvait voir ni le commencement ni la fin ; et, sur les flancs de cette colonne monstre, toute une population pour témoin de la manifestation de ses forces les plus vives. Douze heures pour épuiser le passage de ce flot, de ce fleuve, de cette mer humaine !

cf. lettre à Maurice Dudevant du 21 avril 1848

27. *ibid.* pp. 32—33, 35

Les grandes choses matérielles causent un certain effroi. Les hautes montagnes donnent le vertige, l'océan épouvante la pensée, l'orage ébranle l'imagination. Toute admiration extraordinaire est mêlée de surprise et d'une sorte d'écrasement de notre être, qui se sent petit et faible devant les phénomènes de la création. Mais les grandes choses humaines causent une admiration tout opposée. Il s'y mêle une confiance sympathique, un élan de solidarité sans bornes, un attendrissement enthousiaste, un besoin d'aimer et d'embrasser l'humanité tout entière, qui font



que notre être disparaît et que nous vivons par toutes les âmes, que nous respirons par toutes les poitrines, que nous voyons par tous les yeux, que nous crions par toutes les voix. La multitude ! qu'elle est puissante et qu'elle est douce ! Comme la loi divine est écrite sur son front, comme la vérité la conduit et la fait vibrer !

(…)  
quand cette âme de la création est inspirée d'une seule, d'une grande pensée, quand elle proclame la liberté et l'amour fraternel à la face de Dieu qui reçoit son serment, quand elle chante en chœur l'hymne de l'amitié sainte entre tous les hommes, où sont donc ceux qui pourraient protester contre un pacte scellé avec Dieu même? Ceux-là mêmes n'existaient plus aujourd'hui. Ils étaient vaincus. Ils criaient malgré eux avec le peuple et comme le peuple, Demain peut-être, ils essayeront de redevenir ennemis. Aujourd'hui, ils ne l'étaient pas, ils ne pouvaient pas l'être. (…)

Peuple, donne-nous souvent de pareilles fêtes. Elles sont une grande leçon pour l'humanité, une grande manifestation de la Providence. (…)

Le peuple a la force matérielle, le sentiment militaire, la conscience de son droit, et son fusil représente la ferme volonté de le conserver. Mais le peuple a une autre force plus grande et plus belle encore que celle du droit. Il a le sentiment profond du devoir, et le devoir, pour lui, c'est la fraternité, c'est l'amour de son semblable. Le ciment de la grande forteresse humaine qui s'est déployée sous nos yeux, le 20 avril, c'est l'union des âmes, c'est la solidarité des cœurs.

28. 『真の共和国』1848年5月2日号に掲載。 *Souvenirs de 1848* に再録 (pp. 65—74)

29. 『真の共和国』1848年5月28号に掲載。 *Souvenirs de 1848* に再録 (pp. 127—140)

30. 「戦争」1859年5月15日

*Questions politiques et sociales* に再録。(pp. 305—319)

31. 「ガリバルディ」1859年7月4日

*Questions politiques et sociales* に再録。(pp. 321—346)

abréviation

*Corr.* = George Sand, *Correspondance*, édition de Georges Lubin. (éd. Garnier Frères, 1971)

なお、*Souvenirs de 1848*, *Questions politiques et sociales* は、George Sand, *Oeuvres complètes* (Slatkine Reprints, 1980) を用いた。